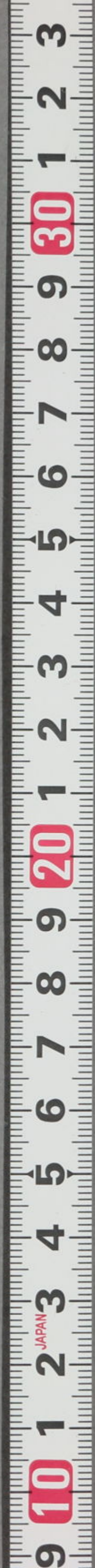




繪本忠臣藏
後三篇

中村進午文庫
文庫5
702
13



H68
IV
番 514 13
因

所屬 HK
部 中村健文庫
卷 9642
小番 3

昭和十五年一月十日
中村本天
贈

昭和三十三年十月二十七日
法學部研究室より移管

繪本忠臣藏後篇卷之三

目錄

- 僧徒瀟護泉成寺
附力弥知訃言
- 不義士到泉成寺
附力弥知訃言
- 力弥為俳漫示餘勇圖
- 瑤成尼令侍婢勞諸士
瑤成尼對寺田問夜討狀圖
- 侍婢外瀟閱高野氏首級圖
高貞夫人以貧裝金救百姓圖
- 右兵衛請養父首級
滿成院使僧爭首級圖



高野氏門外成市文落書

○高野氏門外成市文落書

○足利家始論諸士

○官使到泉成寺

○義徒等被配置諸家郷

○其二

○其三

○其四

○其五

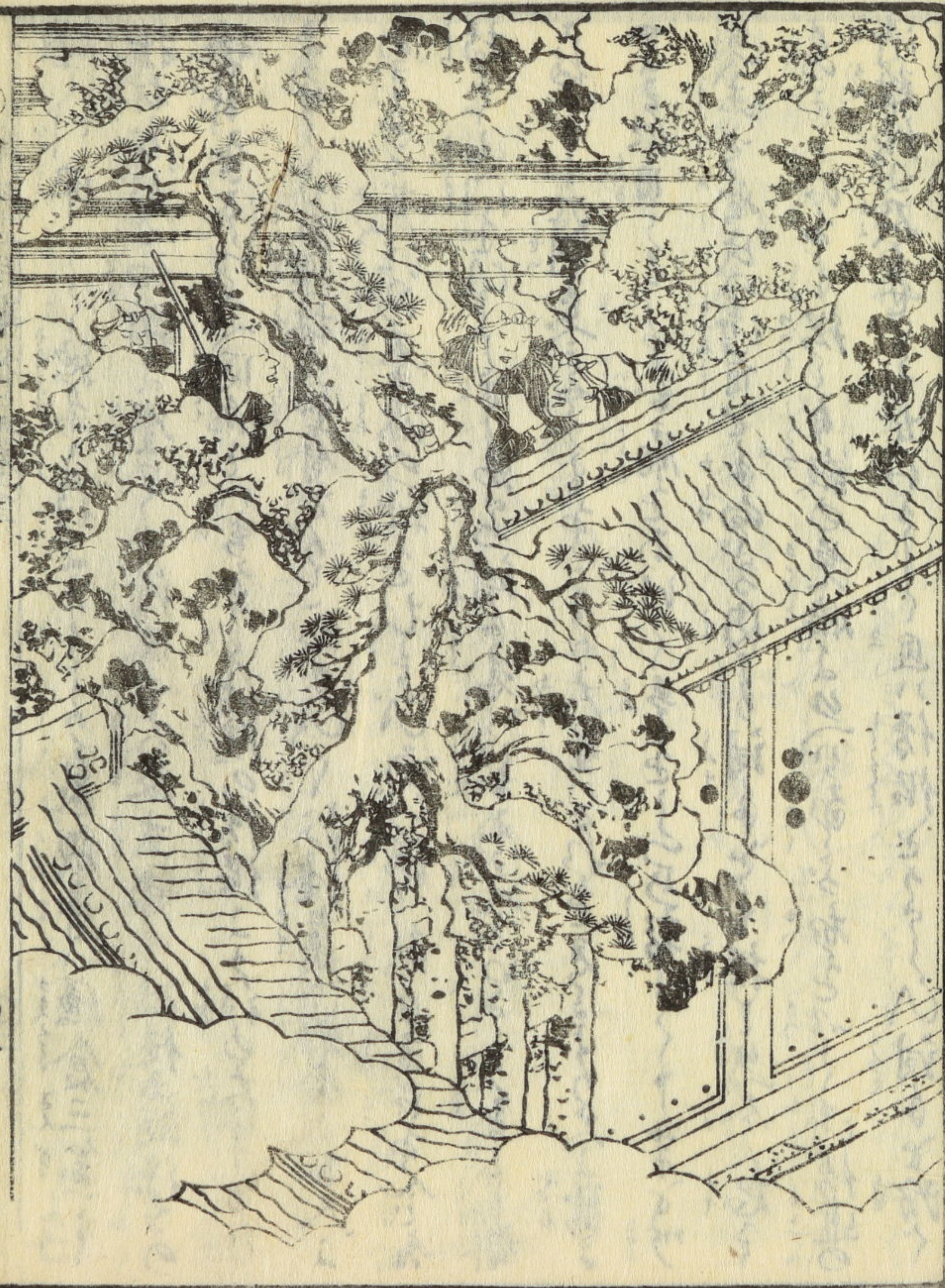
以上

繪本忠臣藏後篇卷之三

僧徒衛護泉成寺

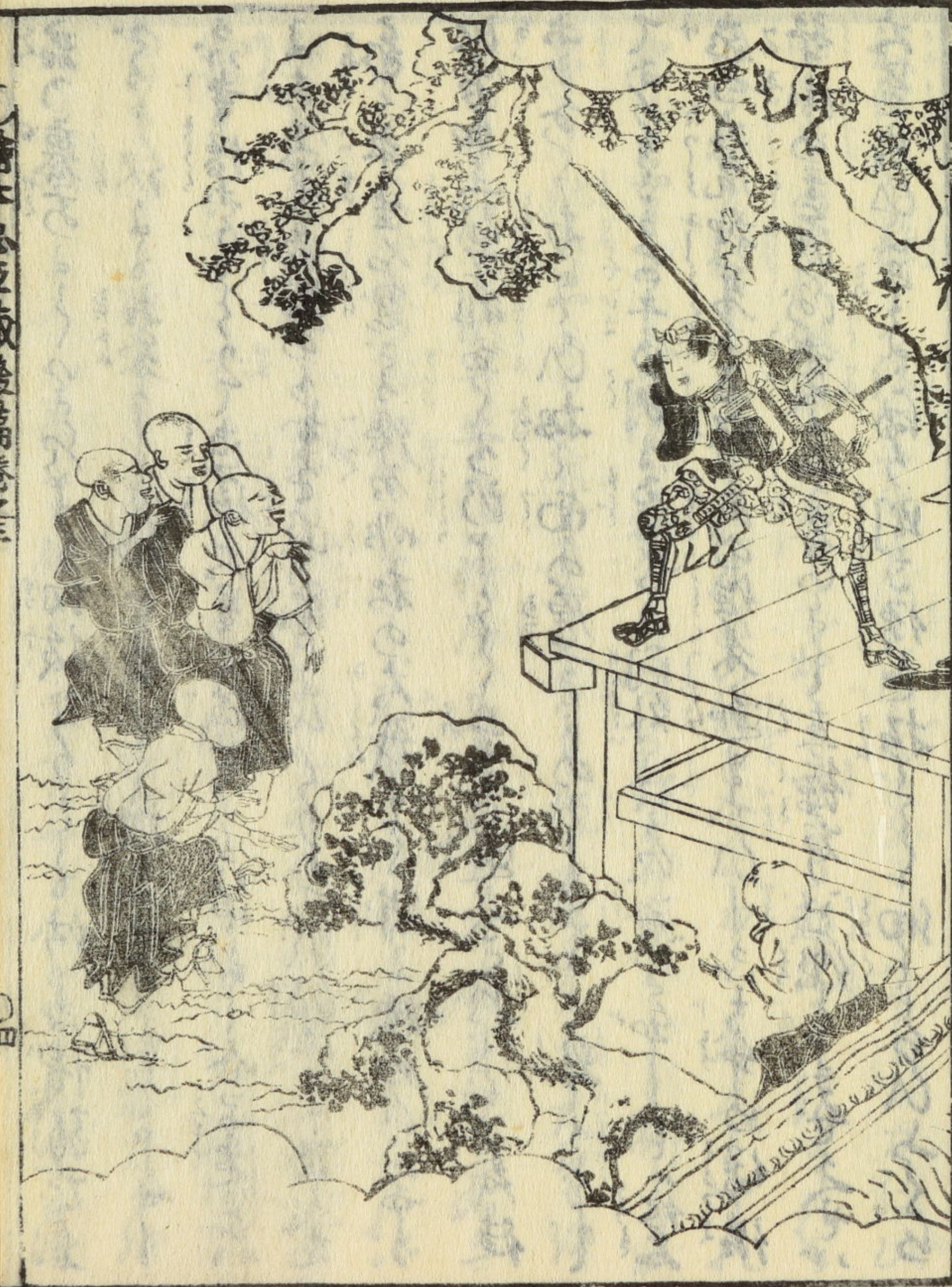


扱も泉成寺の徳士木のりくあり大さあはれこまよとんく
 足利家の御(大)延(延)了(了)せしを和尚中(中)助(助)よむひ(ひ)来(来)成(成)了(了)
 かくのどく(ど)に(に)上(上)の(の)高(高)寺(寺)より(より)只(只)今(今)足(足)利(利)家(家)御(御)海(海)中(中)上(上)の(の)お(お)ひ(ひ)言(言)は
 系(系)知(知)ま(ま)る(る)べ(べ)し(し)も(も)押(押)納(納)る(る)中(中)の(の)用(用)も(も)事(事)も(も)ら(ら)寺(寺)中(中)の(の)者(者)も(も)
 申(申)付(付)ら(ら)る(る)御(御)手(手)を(を)持(持)て(て)甚(甚)候(候)和(和)尚(尚)の(の)お(お)ま(ま)り(り)を(を)依(依)お(お)の(の)り(り)に(に)御(御)手(手)を(を)
 して(して)ハ(ハ)お(お)の(の)ま(ま)ま(ま)し(し)と(と)別(別)回(回)流(流)の(の)洞(洞)禅(禅)寺(寺)使(使)を(を)ま(ま)れ(れ)徳(徳)士(士)木(木)の(の)来(来)た(た)一(一)
 よ(よ)若(若)く(く)り(り)も(も)仁(仁)本(本)家(家)の(の)御(御)手(手)を(を)あ(あ)ら(ら)ハ(ハ)師(師)檀(檀)の(の)り(り)未(未)練(練)の(の)働(働)も
 かな(かな)ら(ら)ほ(ほ)ど(ど)多(多)く(く)を(を)る(る)中(中)の(の)御(御)手(手)を(を)御(御)手(手)を(を)入(入)し(し)て(て)ま(ま)り(り)と(と)ま(ま)り(り)と(と)
 洞(洞)禅(禅)寺(寺)の(の)和(和)尚(尚)何(何)ら(ら)御(御)手(手)を(を)入(入)し(し)て(て)ま(ま)り(り)と(と)ま(ま)り(り)と(と)ま(ま)り(り)と(と)ま(ま)り(り)と(と)



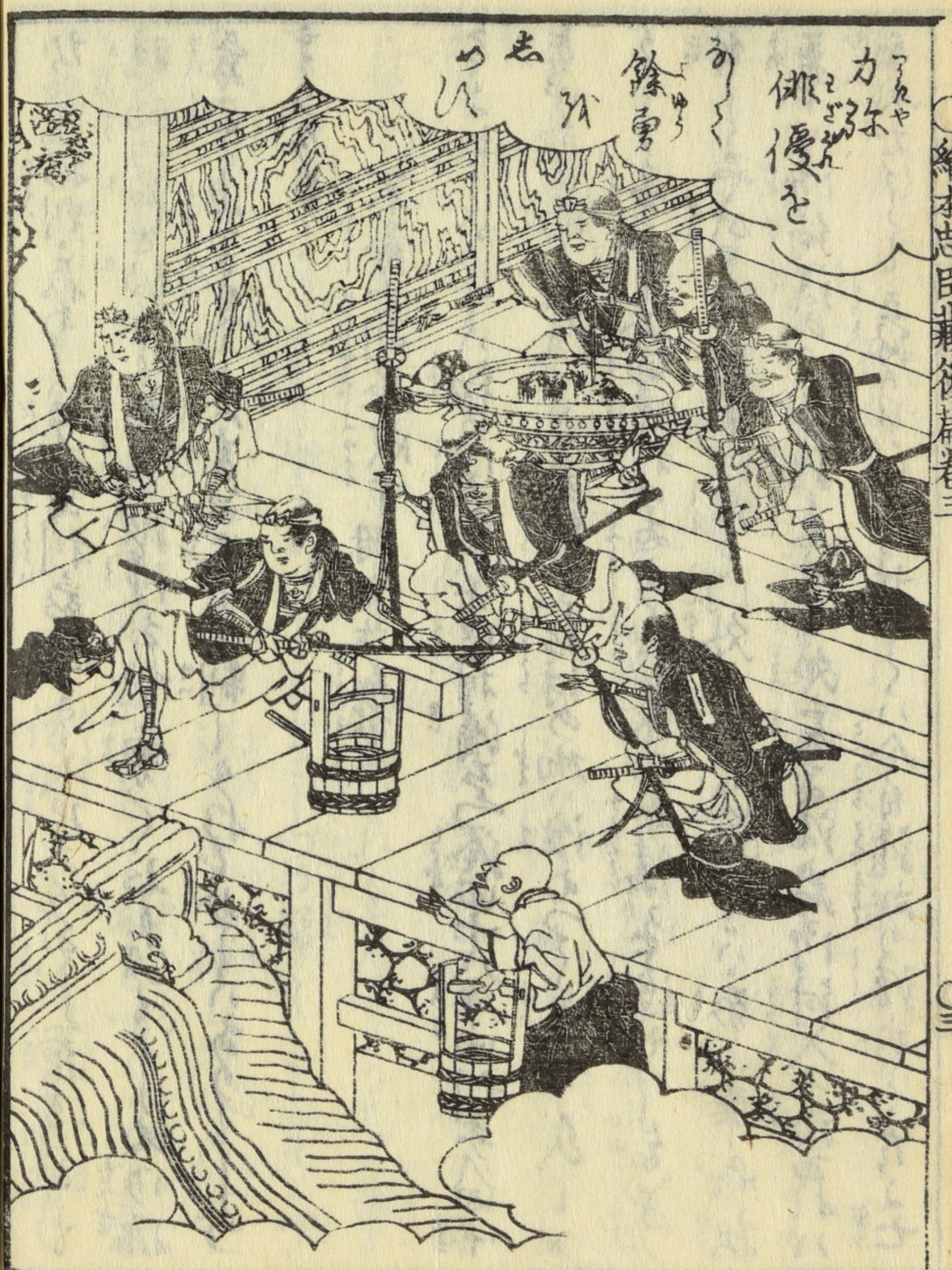
續本忠臣藏後編卷之三

不義士
泉成



山崎の陣

四



力余
優を

續本忠臣蔵後篇卷三

三

君の憂事ありしをいふやよく切抜なりとも仕へば情弱なり
 ざるや況んやもお察ししと恥と思ひし推察せりし中
 へは奇情ホとてし出候大星は拔せし中へは介子遣ふ
 よあふくお君のちかきひさなるいふらあはひは
 御心平生ん懸る候所御社の大敵とて殊と腰ぬけの
 におぬはは是れ御心なりしをいふは是れ御心
 おもひくお君の御心なりしをいふは是れ御心
 てありきふふ年の刻もさきく門外よりん
 家の大虎押来るし群虎の怪来迎すいふは是れ御心
 聖徳のまはは海ホ又りや各のまはは直徳なりと
 大星大いふは是れ御心なりしをいふは是れ御心

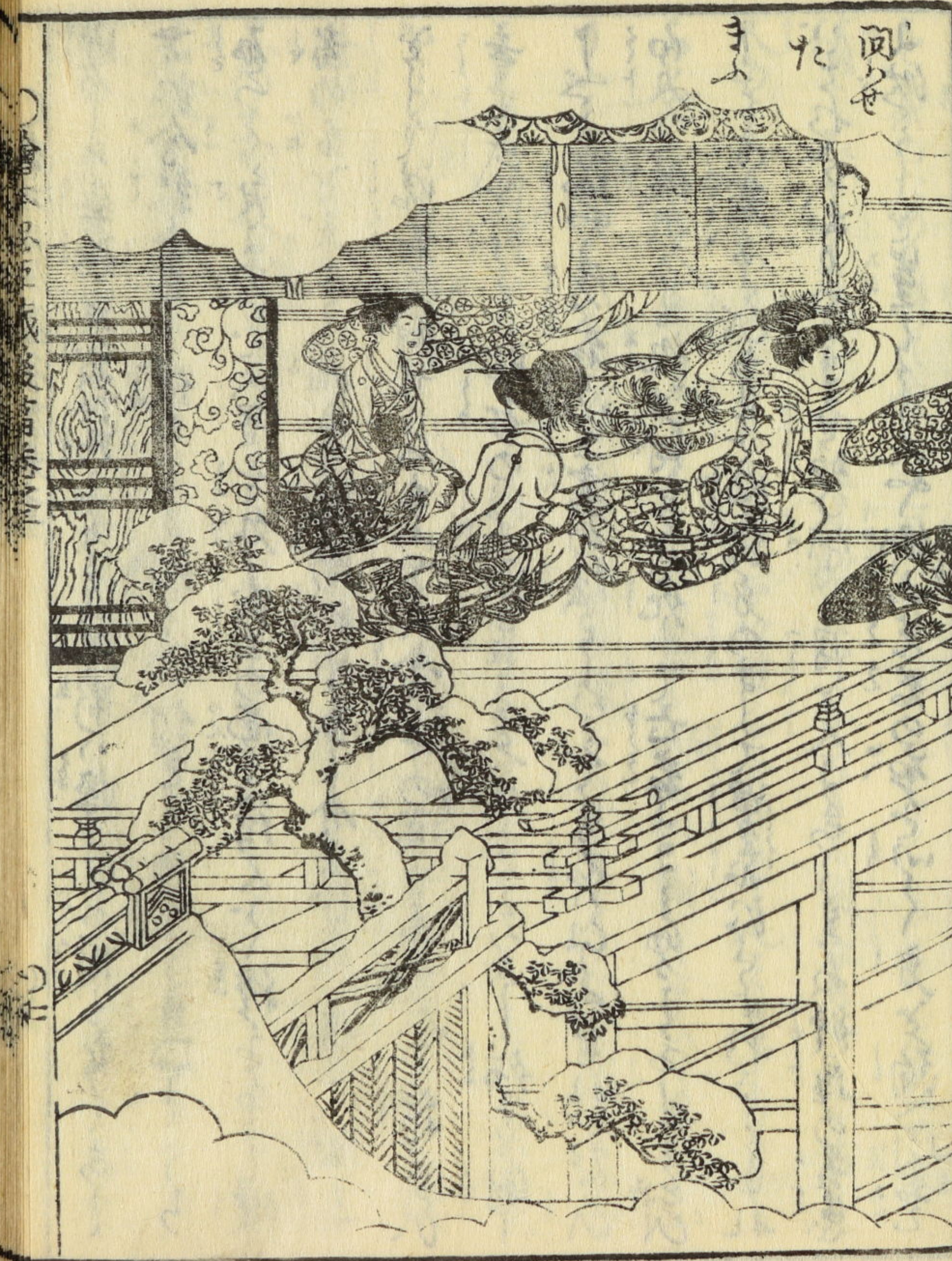
彼僧徒を解しは法士おとすいふは是れ御心
 時お君の方に假寐してありしがかくしつらう起るは法士
 ひ今お君の御心なりしをいふは是れ御心
 中へは奇情ホとてし出候大星は拔せし中へは介子遣ふ
 果しは是れ御心なりしをいふは是れ御心
 感下り候は堀井安房は僧房へ入くお君の御心なりしをいふは是れ御心
 さしは是れ御心なりしをいふは是れ御心
 だしは是れ御心なりしをいふは是れ御心
 我しは是れ御心なりしをいふは是れ御心
 つしは是れ御心なりしをいふは是れ御心
 大よん版しは是れ御心なりしをいふは是れ御心

是をさくら開戦は換せしを破つるさうさうのあねが
 赤直一色にべーとさうくぬと付くさうさうのあねが
 こいさきを謝し則刀とさうく一拵より例は敷きあつたり
 借物さうさうの河坊連のさうの戯坊をさうさうの河坊
 まいりさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 とりよと老人達いさうさうの河坊の俳優をさう
 河坊さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう

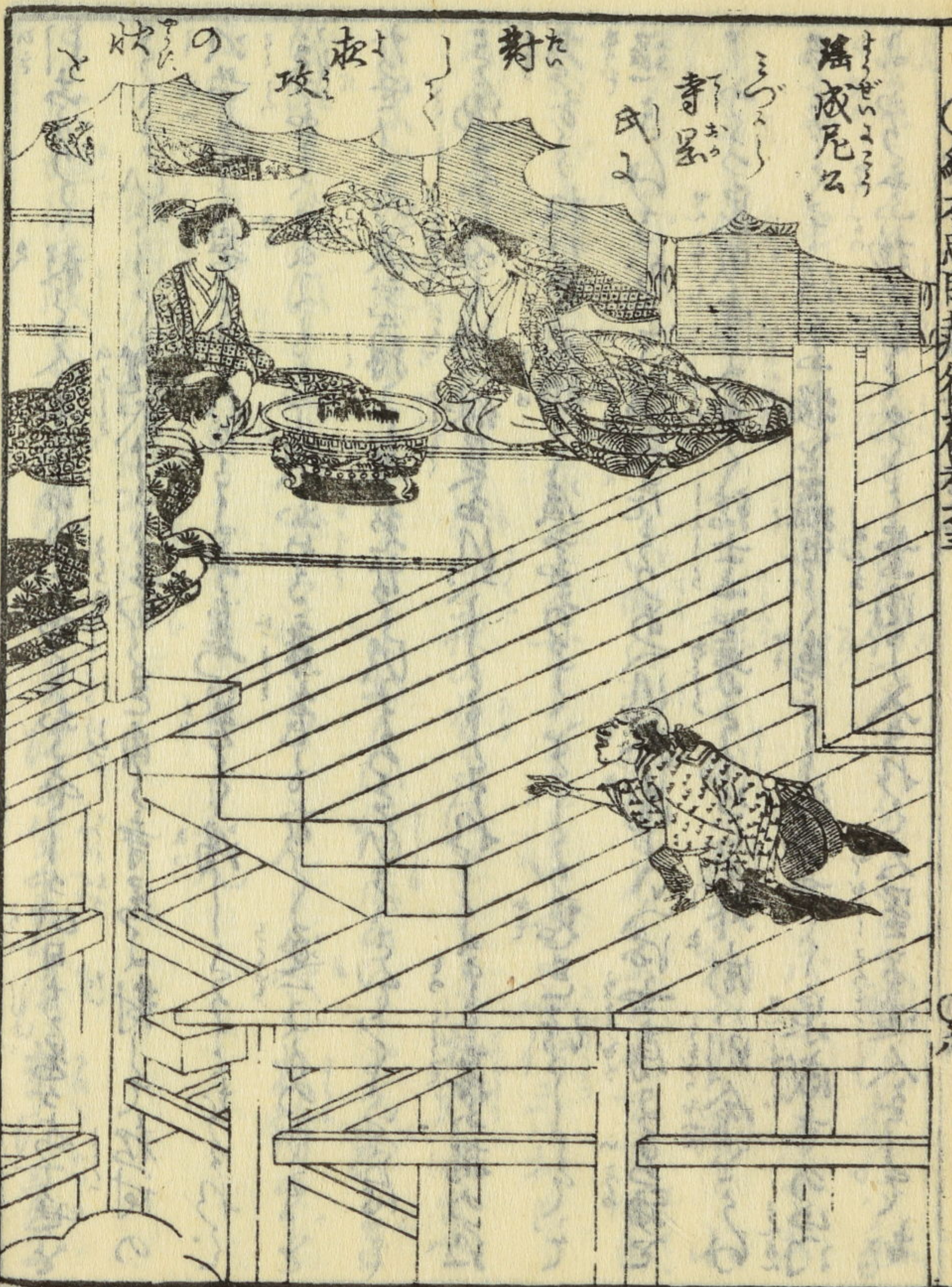
堀成元使侍婢方流士

こゝに堀成の流士堀成院尼の言貞は生書の後ハ幸に言

川ありて敷く人さうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう
 さうさうの河坊の俳優をさうさうの河坊の俳優をさう



また
関
を



と
欣
の
攻
樹
對

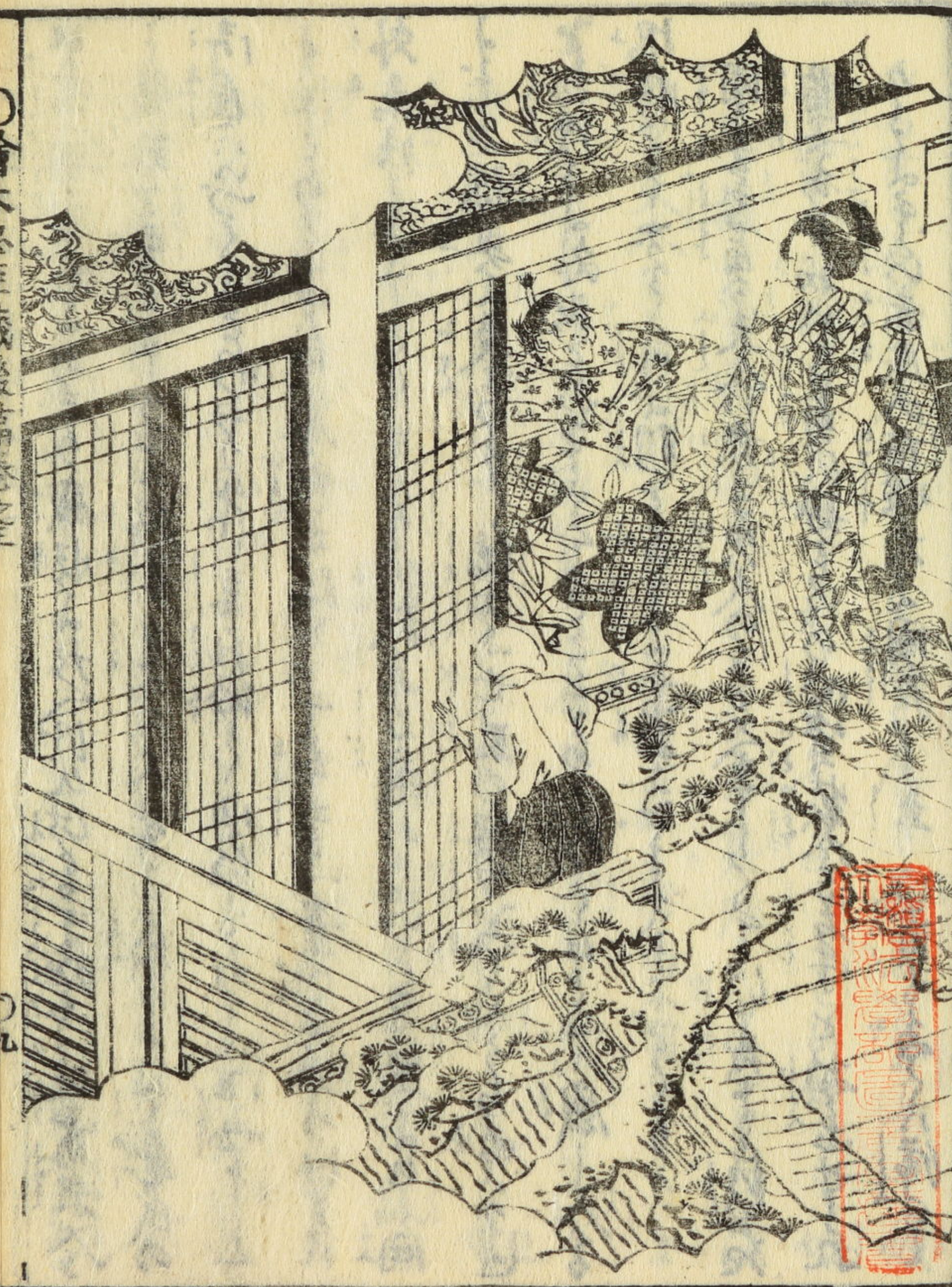
新
氏
の
成
尼
公

繪本忠臣蔵後編卷之三

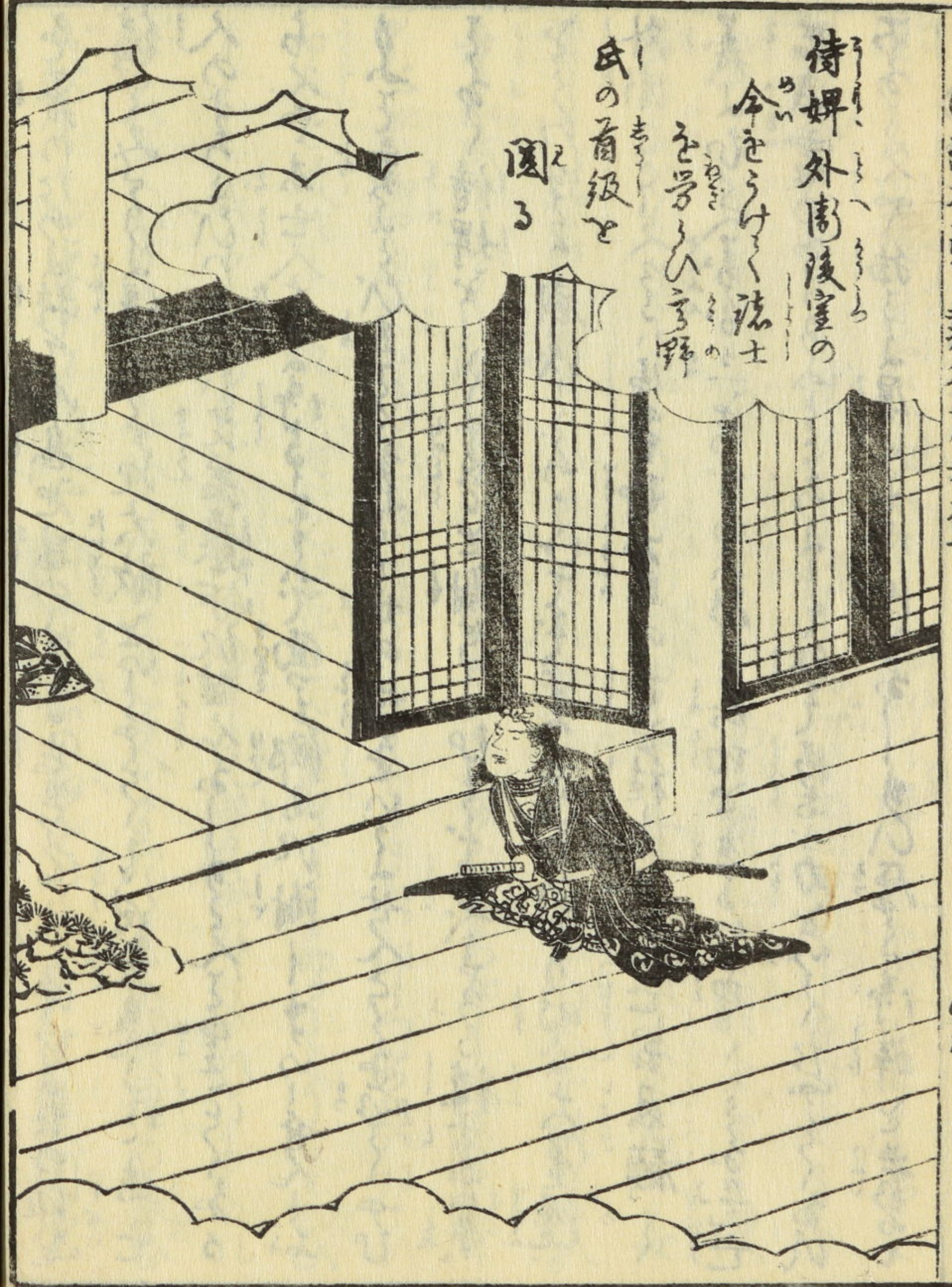
近頃の盛衰存愛は後にもう外擧の將たるを固むくまへ
 中に今秋を以て使のくまへは行はしむゆへに甲乙を
 毎つて其のついでに大里を以て義士の西へ清人ど移すを以て使
 者の名を以てしむ外に外擧別中取介といひつゝ後室に其妻
 として清人の謝せしらあゆみの念年の間も未亡人を以て其
 寺に氏とてしむ外に其の弟を以て其の母を以てしむ外に其の
 弟を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 白女を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 一も其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 ばその母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 又此の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其

を其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 積りて其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 人のより其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 らんや未亡人其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 りて其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 とかく侍婢とて其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 といひて其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 外擧といふは其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 義はむくまへは其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 若威重のあはれは其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其
 亦あはれは其の母を以て其の母を以て其の母を以てしむ外に其の母を以て其

會本 源平盛衰記 卷之三



紅印

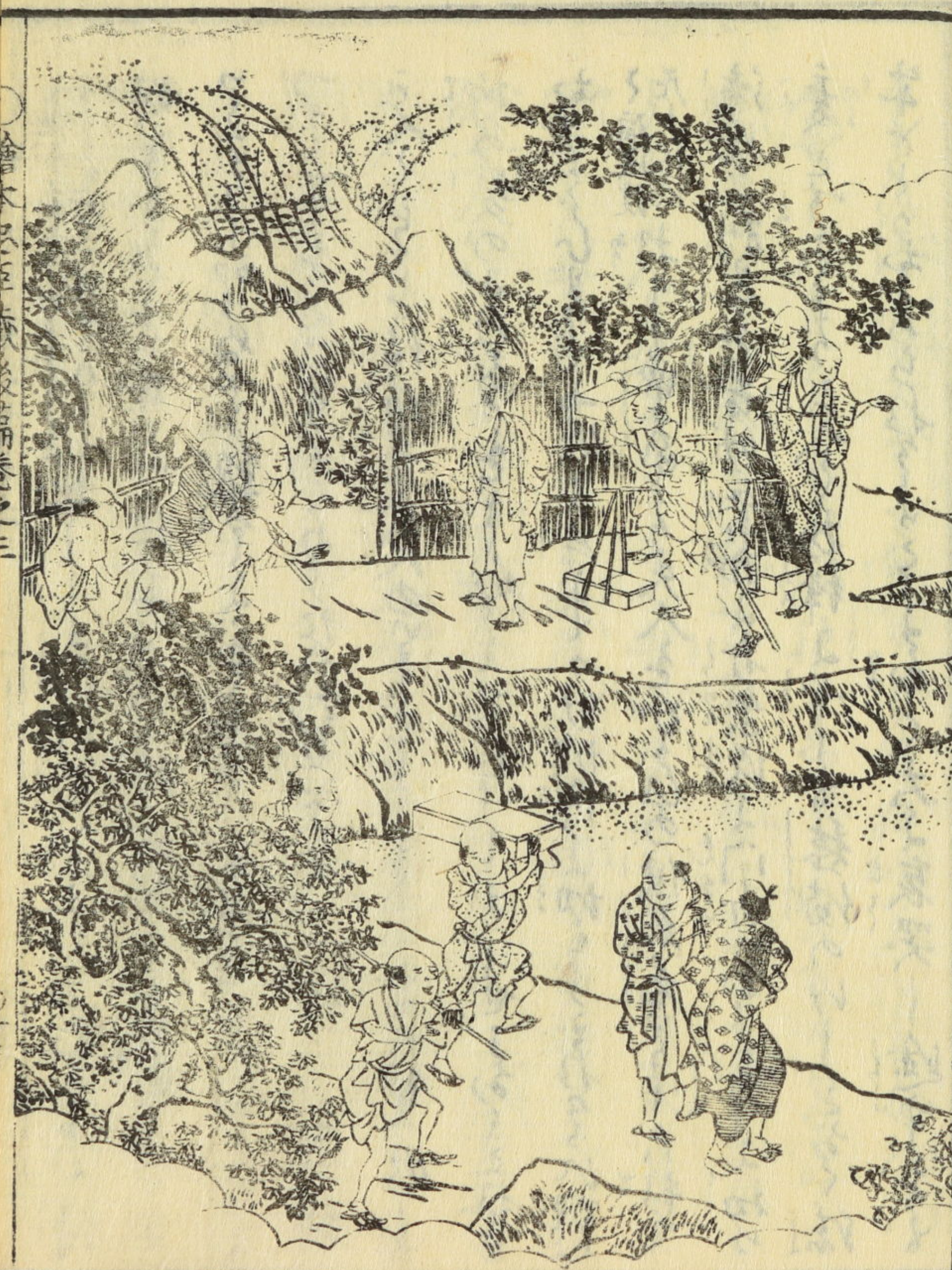


侍婢 外衛 後室の
 命をうけく 法士
 を号しひき
 氏の首級と
 関る

繪本忠臣蔵巻之三

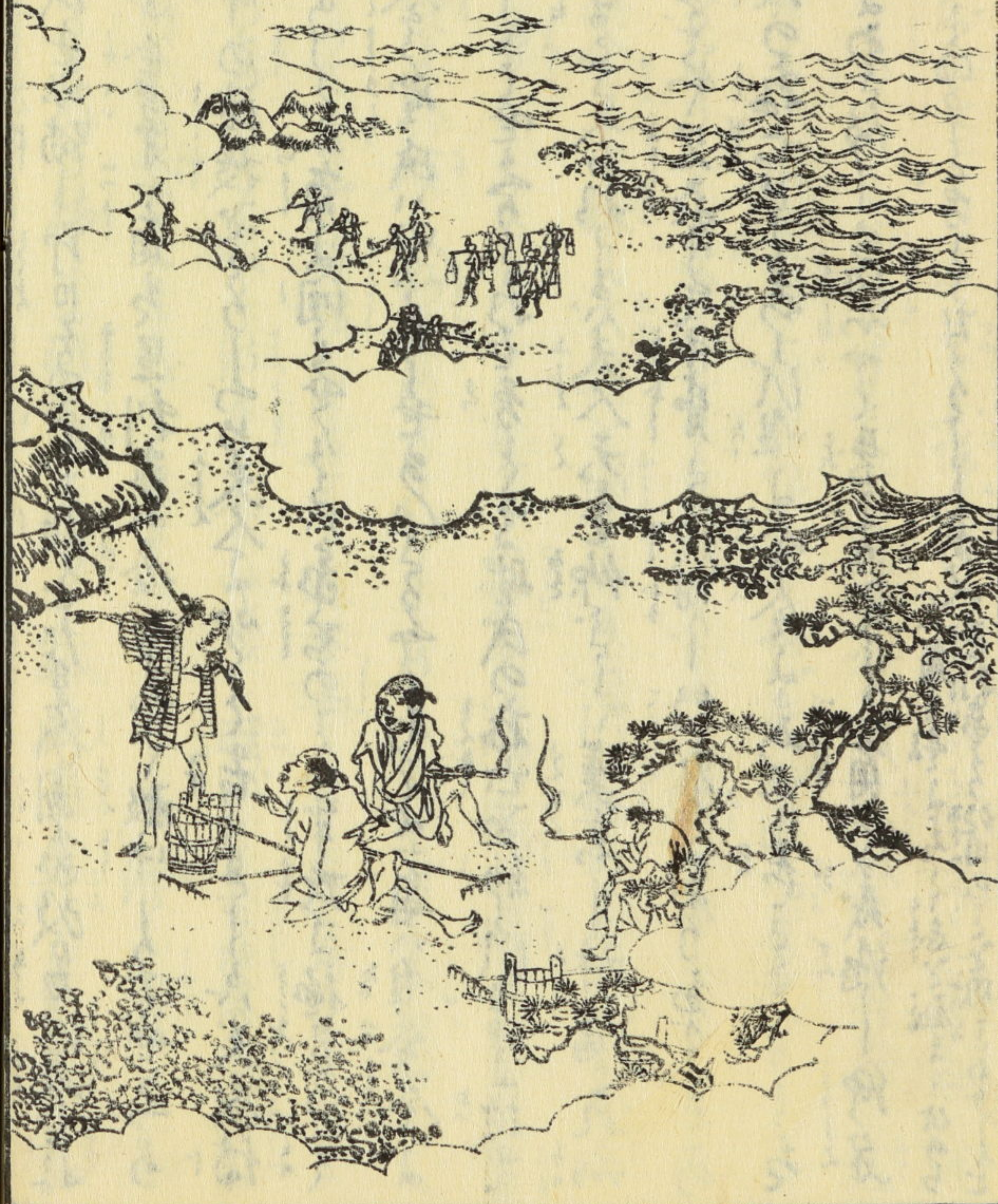
以事一回の事はあまり感懐したくはばいけむ可然事披露於今
と懇懇を以てしうるが外漸まゆく大星よつたうをいひし輩氏の
清直いつくよこねのりれまきお悔くゆらもあはぬ吐りし
とてついでの中ら各別力致して本意を業因せしけり
外果はくくくくくらまのりけ数多刀痕あつたのゆゑは
よそ力致果の慕あつて結すと亡者の種方とくくくくは
とあはれよ外果とおきましてこそあはれくひくく感入る
風情はくくくは別と吾直はまおはくくくく
用よるる自ら夫人の世は夫人のましまししては義とて執を
賢女あわれむる貞の嫁とるの時資装金を若干と持合せられ
くくくは赤尾の百姓大上園病一年の貞もあつた洋に

がらかりければ夫人意の中ら賜は居し其息とくくくは彼
資装金と國中の百姓あつかうらきくくくく百姓どもは恰
も早被は膏雨のぬりくくくくくくくくくくくくくくく
けり夫人のまき彼息とくくくくく後房の入りきとりま
くあられくくくは度おの費と省く又少あつてくくくく
或三年の内は六國富の民きくくくくくくくくくくく
夫人を称するくくくくくくくくくくくくくくくくく
わくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆきくくくく貞大使客役の役義とあつたり出仕のなま
夫人を号と数らんくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくく感懐あつとあつてびのり一或ははくくくく

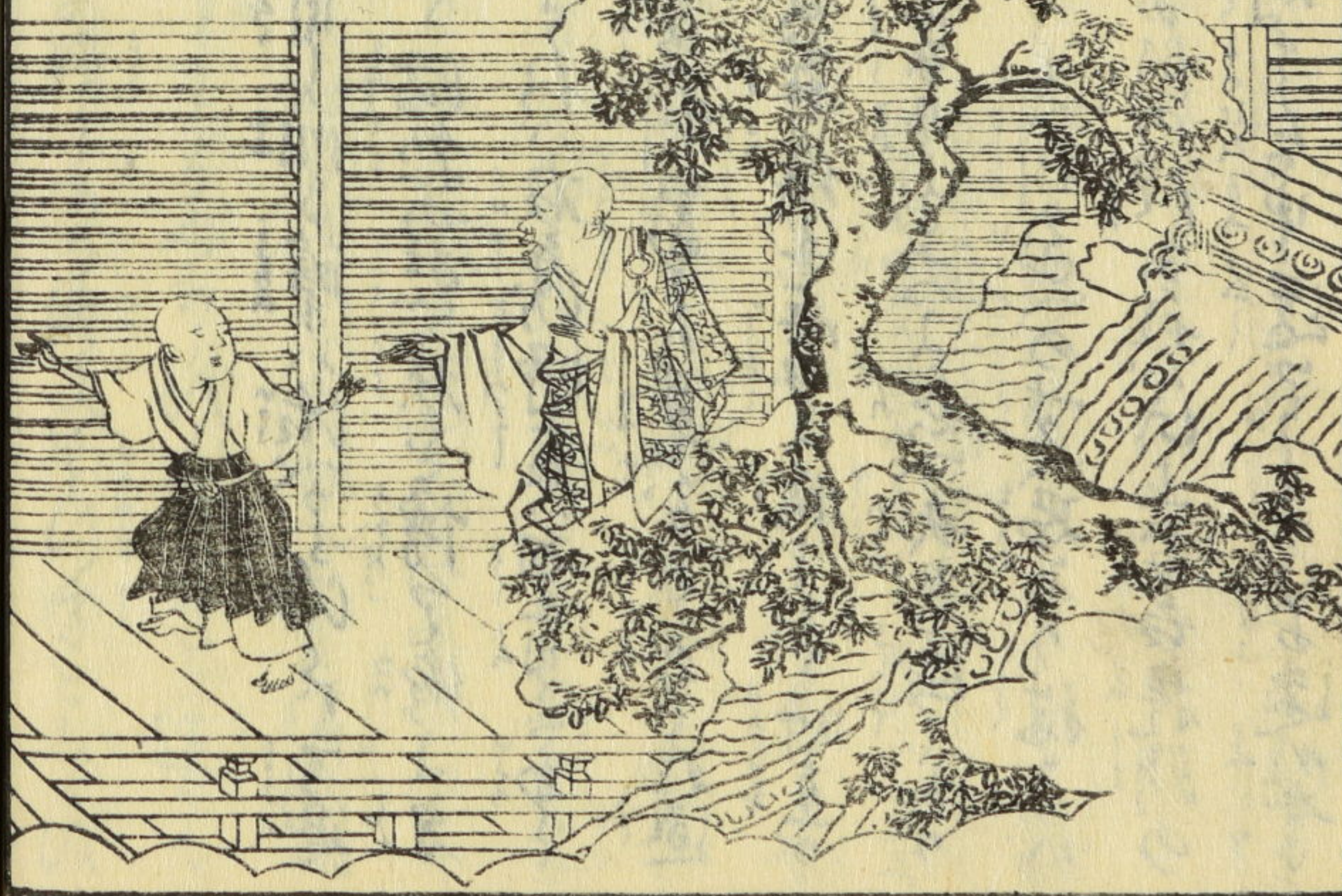
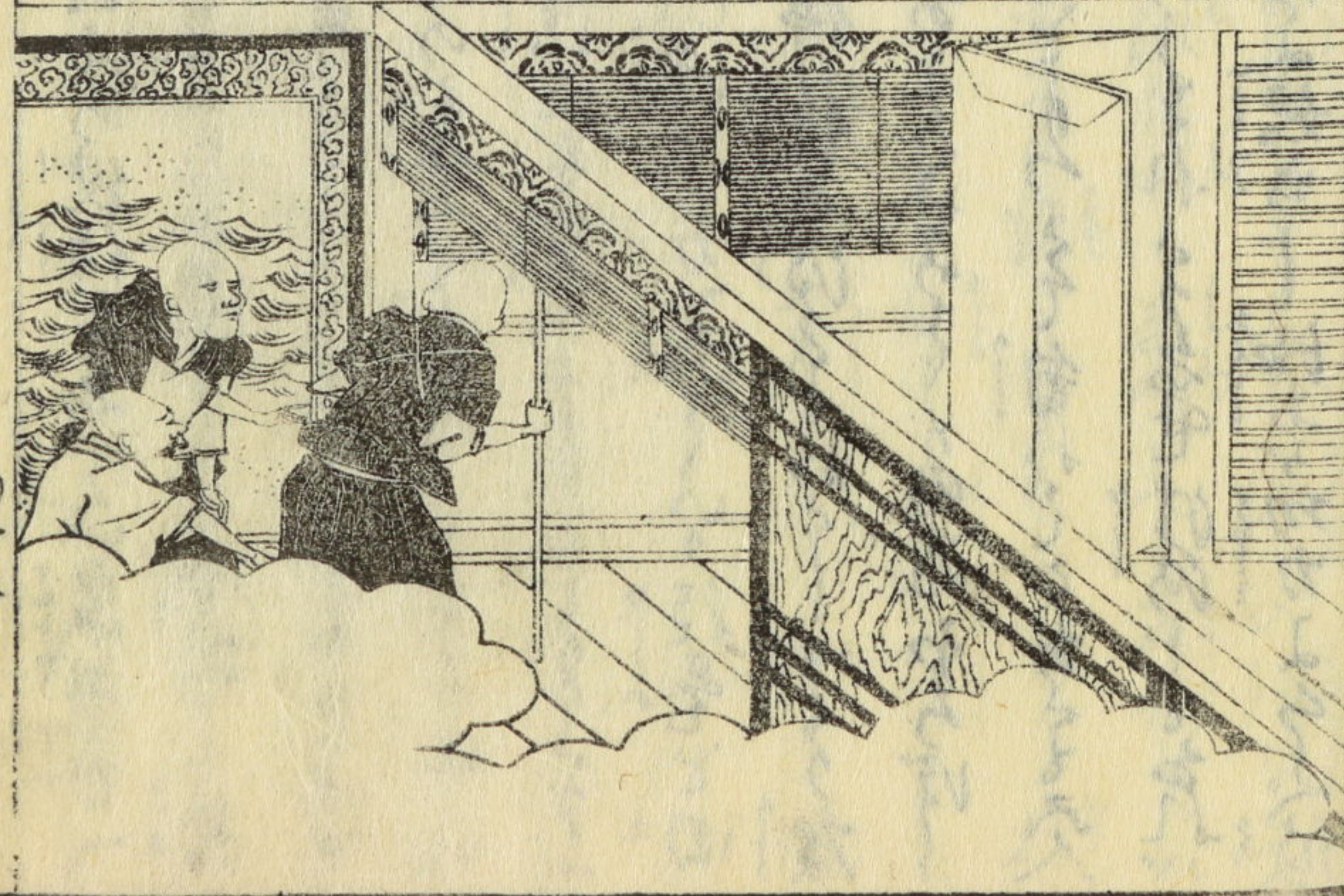
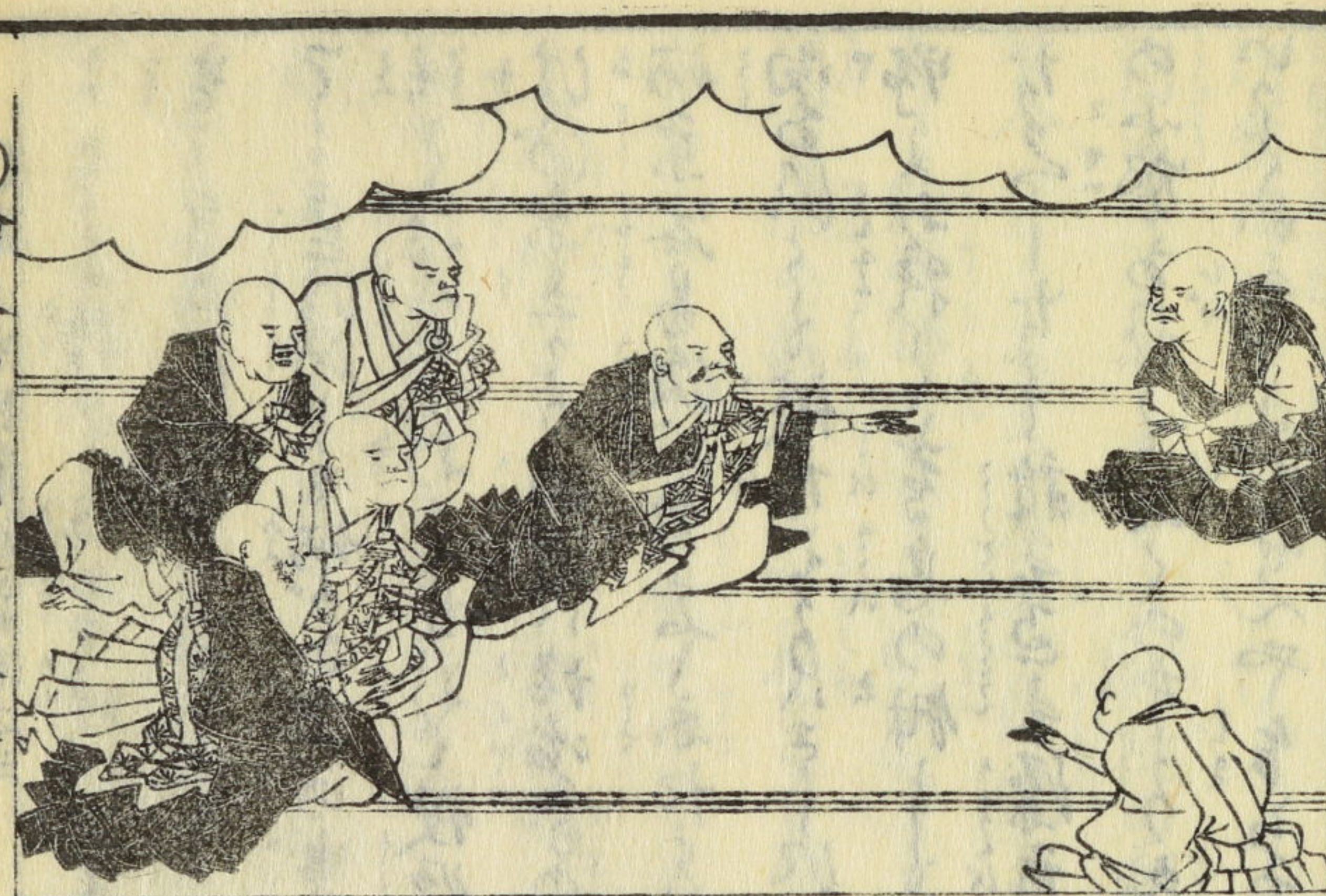


三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

たんご
 考貞の
 夫人
 装束
 を
 かつ
 國舟の
 ひまわり
 百姓
 が
 わる
 た
 あり



三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

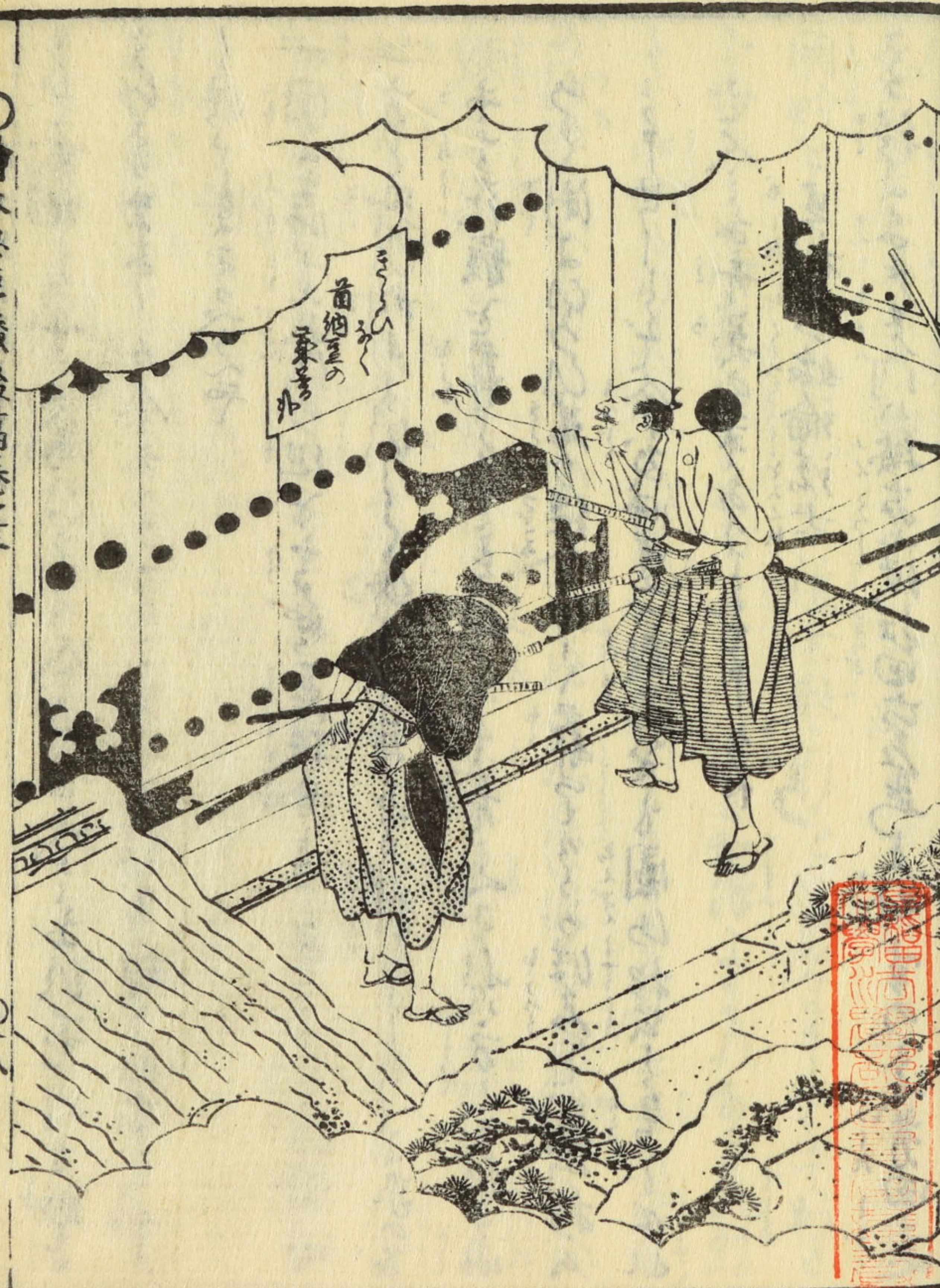


満常流の
使僧
言野氏の
首級
と

新編 徳川実録 卷之三

十四

會不... 儀... 三



言の
門前
衆人市と
あ
子海書を

は不用人森
出入書



繪本忠臣蔵巻之三

とて書付らう呼く久馬ハいるある人ぞやとて入るふひ西川の船を
うける来あり九人あつらふらふ半とあつらうかかあやまらま
しはまはるべんや

園より師直又付の程とて時義後介とせしむるは織田
方と敵の利ありびく終り正月吉野河死せしむるは
おま孔教と葬らんともねむる音入るふは方こそおま
うく御よひのひ暮り終念せく葬りてうかはまを園山松
とせしむる今夜師直が戒名とも園山松とせしむるは
しんる奇美の来ありともうりてわ

足利家始論法士

とて後よふたまへに梅原使相田ちる馬と對生のう芳田遠

其のあまと再び君鞠しとていふ連く出はあり彼あまより乃
同姓とてしよとてしよとて鎌倉殿とてを台望ましくしてか
ふけあつても御家の法を志せりせまの誅と和藩よまれある義烈
とて四例のあつたは異代の判断とてこれを用ひて常
の沙汰あるべしびとのあひしを出仕の法度い法も感激よせひ
煉よる命のぞく希代の君臣是るまゝあるとて武の乃志
地は塚は足利家の御世運業とて稱しとてかくて法目
百官お集り各洋論ありとねどもあ代末同の福来とて
くかす例をあつたは中と一物一夕の沙汰よあつたは
一は義法とて法度よ分配しとてこれを助け西給とて内よ八階目
とてもたなく来まある吟味よ及べしと洋漢一変せしむるは

其の御向ふに... 別を川右門... 大和の法度... 官使到京成寺... 設くおのづか... 官使到京成寺

官使到京成寺

古塔... 二宮... 一國... 出時鎌倉の士風

日孫七士の義烈... 俗を... 成す... 一軍... 軍... 時ハ一應... 義使... 山門... 軸... 是時... 一宮

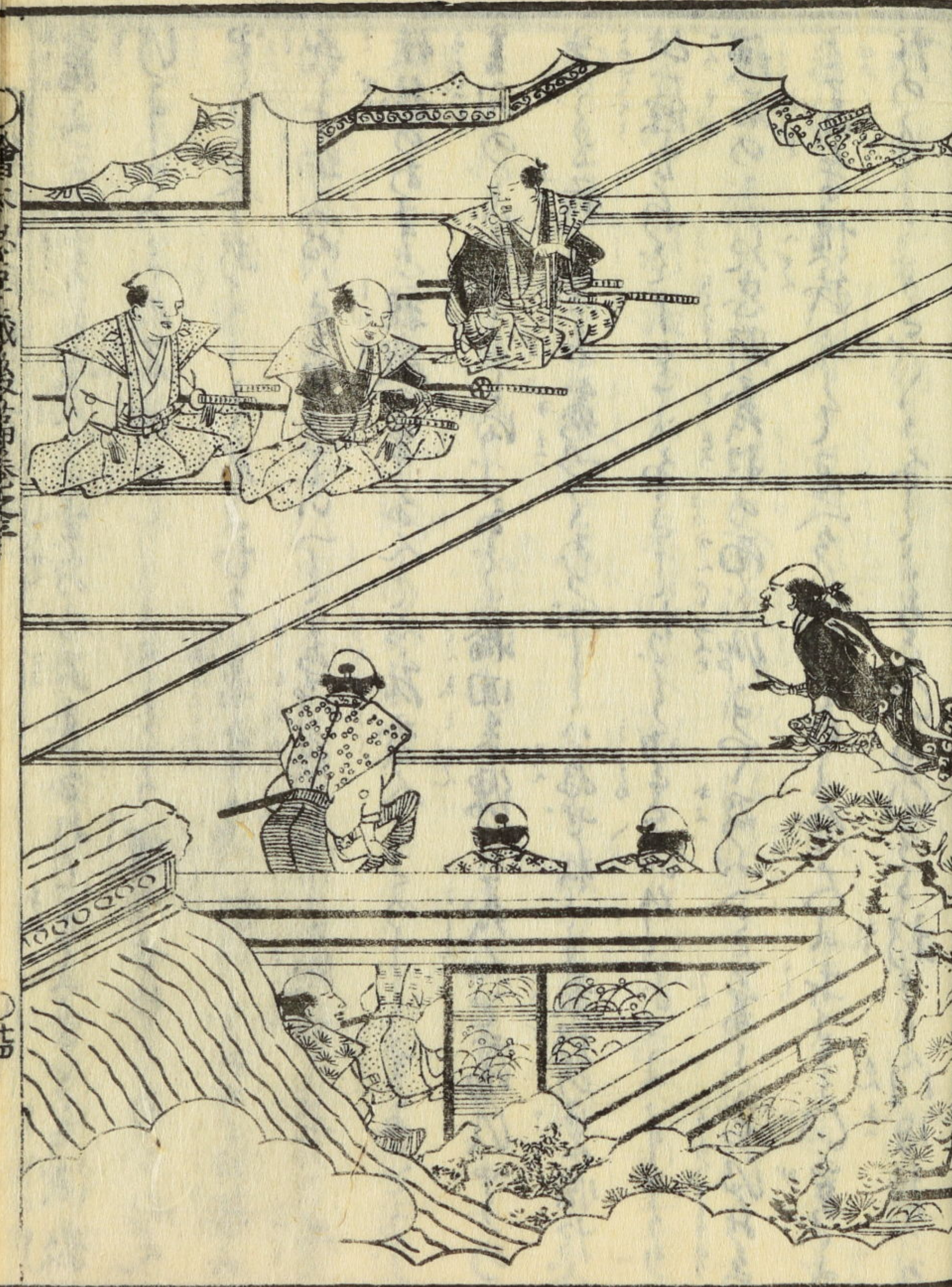


上成及古用三



繪本忠臣蔵後篇卷三

三十一



源氏物語

九



其二

源氏物語

九

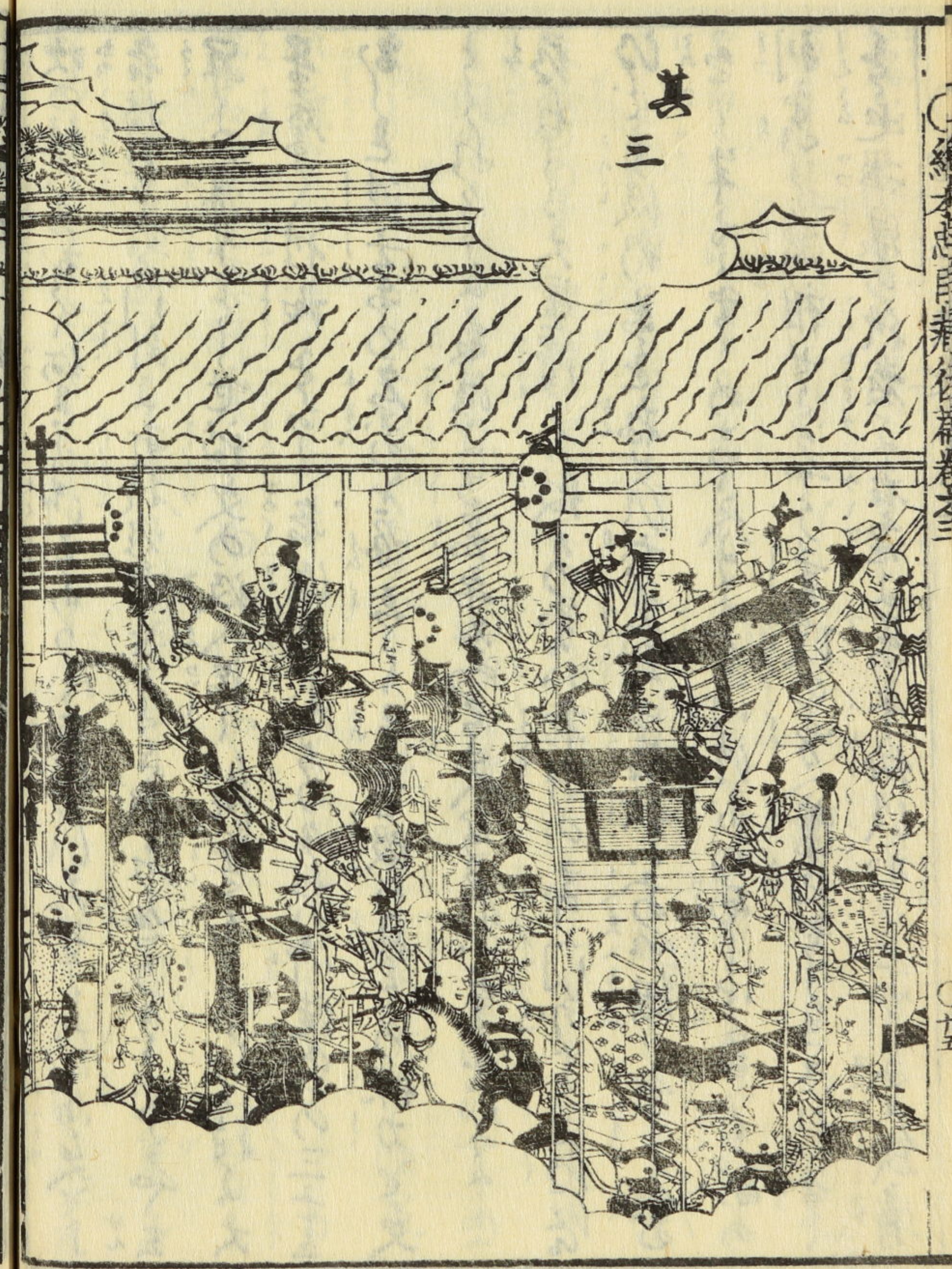
竊よこころを早唯人うがはせおのふきあねをまよふとてな涙敷
 びりりしてつらぬあはれとあはれとてな涙敷
 中を介助して一と流しむらひ者なき清けけりありはれは
 我を助し時ハもあしといては清けのこころも延川よ及ぶは
 後縁のあまの親戚の事おんとは体お人とのこころもまをさ
 書問のこころも一と流しむらひ者なき清けのこころも延川よ及ぶは
 半もも各よがわを霧ひくあぶくはおせねも最後のま悟た
 け一條なれはゆりともおとては清けのこころも延川よ及ぶは
 清石のこころ忠肝義胆の面々作や及ぶとて流しむらひ者なき
 と義を憤然として入るれば中を介助はあはれとては清けのこ
 ころも延川よ及ぶは

次の役人まをく何事も清けありとて一と流しむらひ者なき
 者持たせと門外よおれは清けのこころも延川よ及ぶは
 罪よハ湯をこころせは文の役人流しに流しをこころも延川よ及ぶは
 星屋く種をこころ一各流しおとらりたれは清けのこころも延川よ及ぶは
 おと流しをこころおとらりたれは清けのこころも延川よ及ぶは
 とては清けのこころも延川よ及ぶは
 ねわくも大星清く彼のおの事ハおれの事門外を問はれは
 けりては清けのこころも延川よ及ぶは
 おと流しをこころおとらりたれは清けのこころも延川よ及ぶは
 列をこころも延川よ及ぶは
 逆揖儀の流しをこころおとらりたれは清けのこころも延川よ及ぶは



續才忠貞傳卷之三

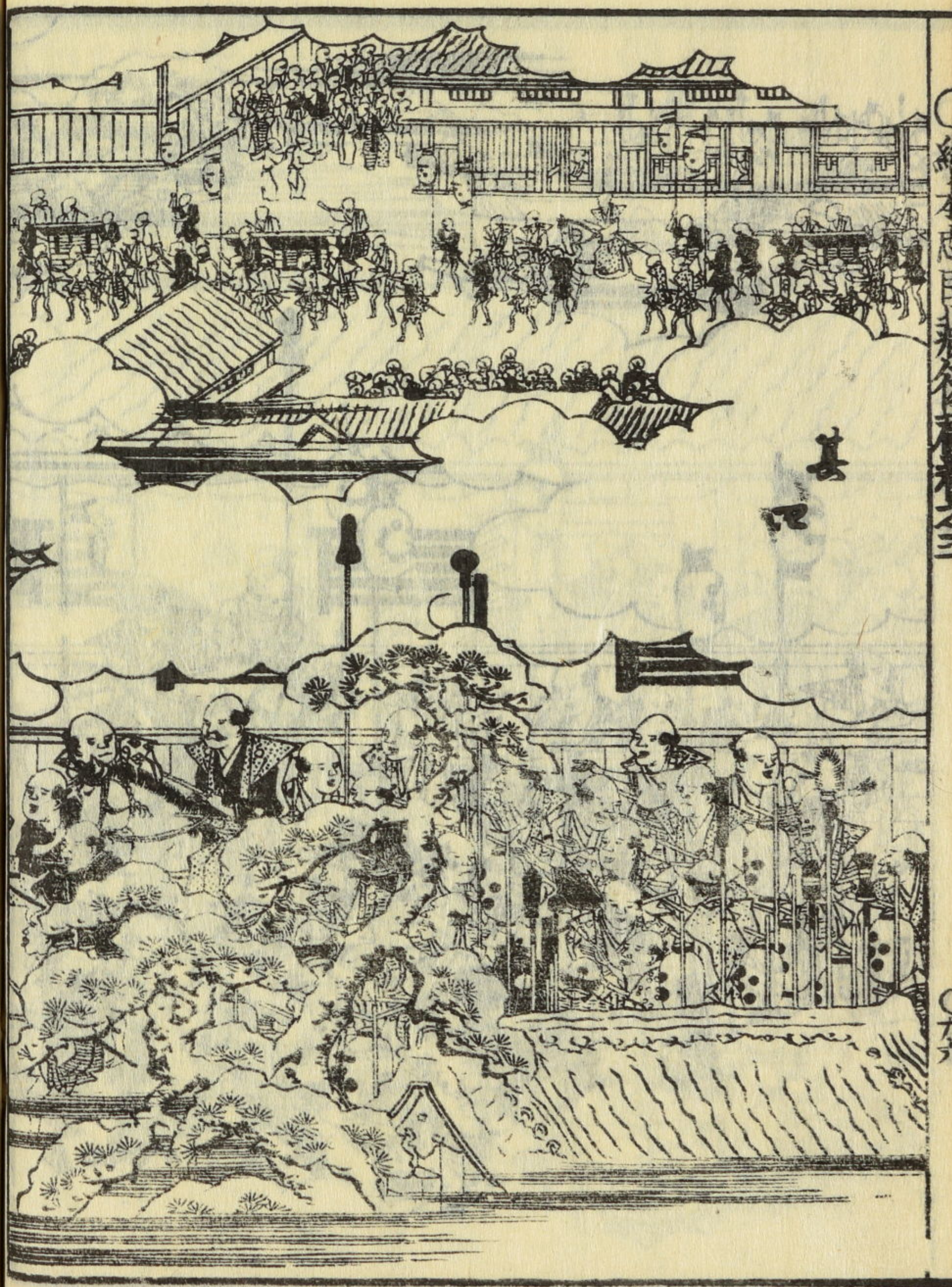
九

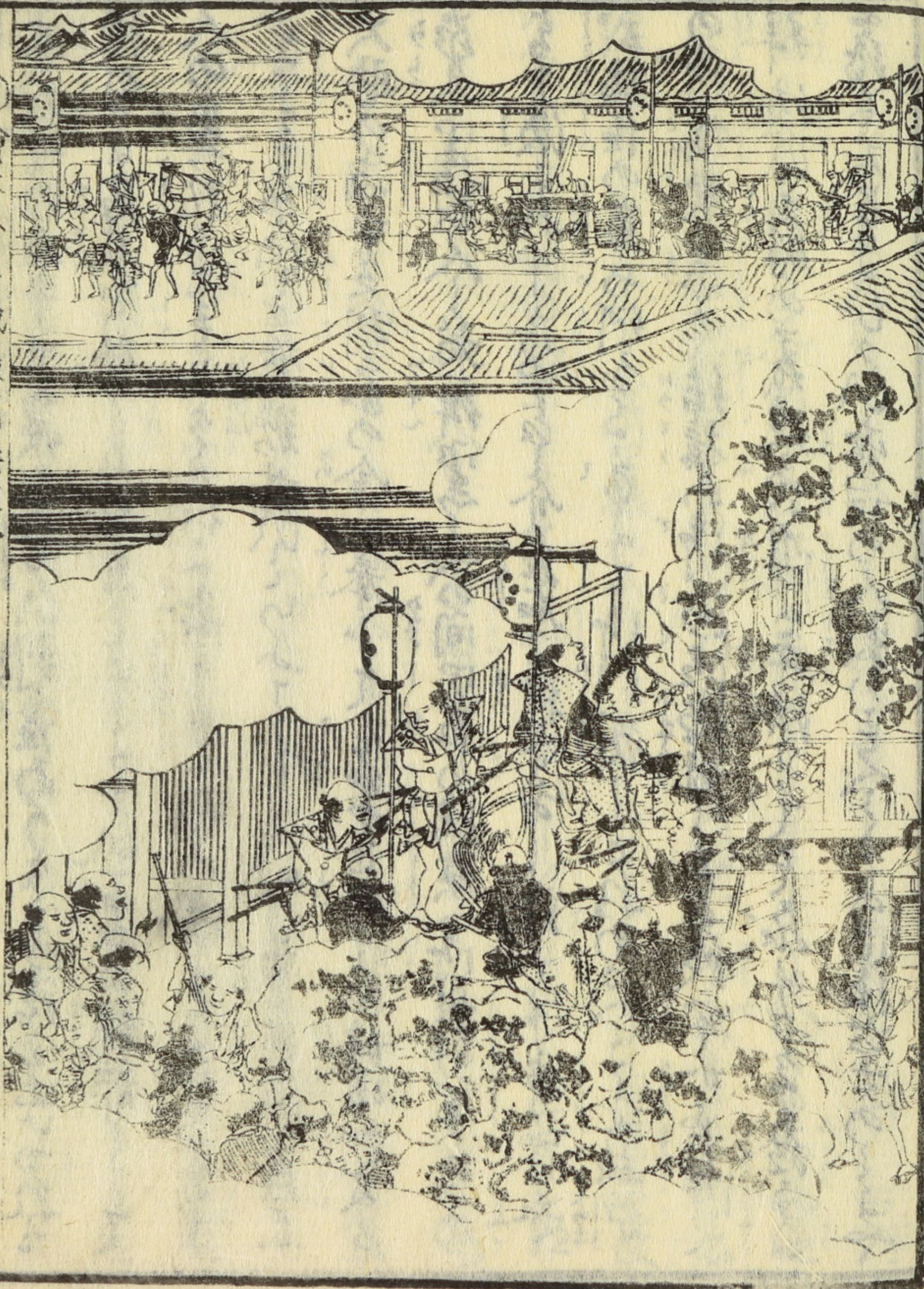


其三

續才忠貞傳卷之三

九





其八

本大世のま案案使を伴ひ列をわたりたるが法未といつれは
預装よ名本と替へらぬをいふやひ二宮よ教部として
人の鼻孔を穿らるるは者なき悟の標とくはたあ
ぶるすをわひを賛助せむいふてあし一財は案案使に
大世のま士是利の命を奉じてまを西へは培治判友が
あまは後六人若一伴中へづの間は家の徳度一財にけあるの
ち中後され一六申を介左右に様をあ一澄くやうを
武隈臣の輩は何あるもの清川渡一とわあるべしを旅訓
の所懐業とあく結集の清河法信付くまの殿守加を極
拜伏しを降の義使あ准よ平伏してぞあたりたるは
あまは六星よむらひお討の人数はとてこのは後士とのま

とららるる大星とてくはの西中まへに家士の兩にけ判
官が志を継ぐえの今け一列に居るままくはとも赤尾返
去の砌より東西數百里の間よを散はるるぞおおとよ別
はりのとそはらうよけは後六人のまへにまへに案案使
はるまもお討の始末よりまをまを引ひ一はまをへて
ありしに申ぬく介一人よを對水の流るるまへに傍方田作
これを助るるのまへに除ハ只もと撥く然猶より財は大世氏
府中をおあがら大星力保ハいつまはまを中へあまよ力保
案案とまへにまへにまへにまへに大世氏つくとおあり年
いう能ありやし同の南年十五案案よおありまへに大世氏
おいよは案案とまへに弱軍の中へあまをいふてまへに

大世氏つくとおあり年

おいよは案案とまへに弱軍の中へあまをいふてまへに

卒十人を以てこれを野合し一法の提灯屋とてしめて
そのあつたをなるとし使者のあまのあ押ししてゆく
あつてして別を傳へて門を餘三もあつたといはれ
乃烈教童小者おへてハ引たるは極月十二夜まの刻に
ろあるは一輪の寒月をとり地灯の影をいふおはなれば
せしおとすていひて静くあつたは深余年の人氏を
のけりこのお強よとてこれをえりあつたは極月十二夜まの刻に
まあるは況たると人とおへて

繪本忠臣蔵後篇卷之三

